

富士山麓病院介護医療院新聞 第177号

富士山麓クリニック



夏祭りで金魚すくい！

《症例検討・124》

家庭生活が認知症を誘う

院長 清水 允熙

家族関係のまずさが認知症の一因

私たちは、家庭生活が認知症の進行を早めているケースを数多く見てきた。その多くは家族関係のまずさに起因している。とりわけ女性の場合、息子の嫁との折り合いのまずさが認知症へ向かわせる原因となることが多いことは事実である。生なさぬ仲、嫁と姑の関係は永遠の業なのだろうか。



孫は息子のコピー

孫の教育をめぐつてのいさかきも多いケースである。「憎い嫁可愛い孫をやたら生み」とは江戸時代の古川柳だが、母親にとって孫は愛する息子のコピーであるから、息子を嫁に取られたと思い込んで

る姑は、可愛い孫を溺愛しがちである。とかく孫のいいなりになって甘やかすものだが、嫁はそれが気に入らない。

Uさんは今年78歳。息子が嫁を迎えたとき、母屋に隣接して離れを新築し、夫婦で移り住んだ。数年後、夫が病死したが、いわゆる「スープの冷めない距離」に息子がいて、食事と一緒にしているのだから、家庭環境としては問題はない。だが4歳になった初孫が保育園に通うようになった

ころ「おばあちゃんは孫に甘過ぎて教育上よくない」と嫁のクレームがついた。しかしUさんの孫可愛がりは改まらない。怒った嫁は孫が離れへ遊びに行くことを禁じ、Uさんから孫を取り上げてしまったのである。

孫が離れて認知症

Uさんの認知症の症状が目立ち始めたのはそのころからであった。食事をしたことをすぐ忘れて催促するようになり、あげくには誰彼なく「食事を食べさせてもらえない」と訴えるようになった。Uさんは孤独だったのである。家族は同じ敷地内の離れにいるのだから、一つ家に住んでいるのと同じように考えていたかもしれないが「スープの冷めない距離」は近くとも、U

さんから息子や孫を遠ざける心の距離は遠かった。その孤独感は夫の生存中からじわじわとUさんの心をむしばみ始めていたのである。症状は当院に入院して一旦は軽快して退院したが、時折通院してくるUさんの様子ははかばかしくなかった。

「元気の素」は孫

そんなUさんが病院に姿をみせなくなったので、ケースワーカーが自宅を訪ねたところ、すっかり元気になっていたという。

詳しく聞いてみると、Uさんの退院後、第2子を産んだ嫁は赤ん坊の世話に忙しく、まつわる上の子に「おばあちゃんのところへでも行っただけでらっしゃい」とUさんのいる離れへの出入りを解禁

したらしかった。孫との楽しい生活が再び始まって、Uさんは元気を取り戻したのである。

嫁が「自分の子供は自分で育てる」と主張するのは母親として当然のことであり、そのことだけで悪い嫁と決めつけるわけにはいかない。まして嫁自身は、自分の取った処置がUさんの認知症を進行させていたなどは夢にも思わない。

このように、自分たちの意識していない家庭関係がお年寄りを認知症へ誘ってしまうケースのあることが、認知症の予防に大きな障害となっている。

今後ますます進む高齢化社会に生きる私たちは、家庭内における世代の相違や、生きてきた時代の価値観や考え方

の相違が、無意識のうちにお年寄りの認知症を誘う可能性や危険をはらんでいることを、十分に認識しておく必要があると思う。それは決して現在高齢期にあるお年寄りのためだけではない。

私たちも確実に年齢に達する以上、自分自身の問題として受け止めることの準備が必要なのである。

思いやる日常生活

その準備は決して難しいことではない。Uさんの嫁が孫の離れへの出入りを解禁したことが、Uさんの認知症の改善につながったのは偶然ではないわけだが、私たちは認知症の阻止や改善に役立つ思いやりのある日常生活を自然に営める人間でありたい、ということである。

といつても、それはただお年寄りを立ててあげればよいというものではない。お年寄りを含めた家族内全員の人間関係を個々の人格を尊重し合いつながりながら自然にスムーズに保てるように、思いやりとやさしさにあふれる感性を養っておくことが望ましいと思うのである。

お年寄りの認知症が始まってからではなく、元気なうちからそうした日常生活を営むことが望ましい。それも頭で考えるのではなく、身についた自然な生活態度で：

それは家庭内の場合だけではなく、近隣にも、社会に対しても、そうした配慮を身についた自然さで振る舞えることのできる人々が増えれば、昨今の殺伐とした世の中からとげとげしい世相が消えるだろう。

御殿場西高校吹奏楽部 によるフレッシュコンサート

7月20日に御殿場西高校吹奏楽部の皆さんをお招きし、フレッシュコンサートを開催しました。部長の長島さんと顧問の斎藤先生がコメントを寄せてくれたのでご紹介いたします。



★部長 長島 瑠衣さん

私たち吹奏楽部は1年生6名、2年生14名、3年生3名の計23名で顧問の斎藤創一先生、斎藤友昭先生のもと、元気に楽しく日々活動しています。

皆さんが演奏を楽しんで聞いてくださっている姿を見て、今まで吹奏楽を続けてきて本当によかったと心から感じました。とても貴重な体験となりました。ありがとうございました！

★顧問 斎藤 創一先生

皆さんに元気をお届けしよう。楽しんでいただくこと、意気勇んでお伺いしましたが、逆にこちらのほうが元気をいただき、皆さんが笑顔で手拍子をしている姿に私たち一同、大変感激しました。職員の方々にも、心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

「喜ばれる食事」を
めざす

栄養課インタビュー

当施設の利用者様にとって何よりも大切で、楽しみでもあるのは食事です。

今回はその食事と最も関わりの深い栄養課のお二人、課長の早野香織さん（栄養士）と水城都さん（管理栄養士）にお話を伺いました。

栄養課の現状と仕事

ー現在、栄養課は何人体制で働いていますか？

早野（以下は早と略す）…以前の食事はすべて当施設の職員が調理まで行っていたのですが、四年前から富士産業（医療・介護・福祉分野を中心に食事の提供を全国で展開している会社）に一部を委託するようになりました。



ミールラウンド中の早野さん（左）と水城さん（右）

なので職員は私たち3名（うち1名は育児休業中）と

富士産業の9名で合計12名です。9名の中にベトナムからの実習生が3名いますが、この人たちは年数に制限があります。

ーでは毎日およそ何人分の食事を作るのですか？

早…1階から3階の利用者さんが145名前後いらっしゃるの
で、検食のドクターの分を含

めて約150食ですね。

ー栄養課の業務内容を教えてください。

早…大きく分けて給食管理と栄養管理があります。

給食管理は基本的に献立を作成して、それに基づいて発注とか食材を管理すること。

調理業務は富士産業さんに委託しています。あとは衛生管理を行っています。栄養管理は水城さんの担当ですね。

水城（以下は水）…こういう

施設の大変さは利用者さん全員が同じ献立で、とはいかないことです。栄養管理は利用者さんの病状に合わせてドクターから食事箋をいただき、個々の食事内容を決めています。体調に合わせて食事内容を変更したり、血液検査や体重の変化を見ながら食べやすいような形で提供するように心がけています。

一人ひとりに寄り添って

ー日々変化していく利用者様を把握するのは大変なことですね。普段から気をつけていることはありますか。

早…第一に安心安全な食事を提供する。次に利用者様に喜ばれるような食事。一人ひとりに寄り添った食事を提供することです。

ー私がここに勤める前は、施設の食事って病院食のような薄味で質素なものだと思っていたのですが、見ると洋食とか凝ったカレーが出たりするので驚きました。

早…そうでしょ。ドライカレーはね、いろいろ隠し味が入ってる。

前任者によく言われていたのが、減塩食にしても食べてもらえなかったら意味がないだから減塩食の方でも一品はしっかりした味付けで他は調整するなど工夫しています。

水…味付けは他と比べてかなりしっかりしたい味、美味しいですよ！

早…あとは地産地消じゃないけれど、お米は御殿場コシヒカリの特A米。お醤油も天野醤油さんで美味しい。出汁は焼津からの取り寄せでこの3点は譲れない。昔からこだわっています。そして素材を活かしたものを作るよう心掛けていますね。

―食事の形態で工夫していることはありますか？

水…食事の形態は主に常菜、刻み、みじん、ミキサーの4種類です。利用者さん個々の嚥下に合わせて、同じ常食でもご飯をおかめに替えたり、汁物とか飲み物だけはムセてしまう方は、そこだけトロミをつけたりして食べやすいような形で提供しています。

―利用者様とはどのように関わっていますか？

水…基本的にミールラウンド（実際に食事をしている場面を観察すること）をして、食事を見させてもらっています。実際に利用者さんと話して意見を聞いたり、今日の味はちよつと濃かったんじゃない？と言われたり（笑）。もつとシンプルな料理がいいとか。―シンプル？

早…魚には鰯をかけないでただの塩焼きが食べたいとか。こちらとしては嚥下を気にしないで、なるべく鰯かけ状態でムセないようにと思うのだけど：―だから鰯かけが多いのですね。初めて知った！

早…あとはケーキバイキングや焼き芋、居酒屋など食事に関するレクリエーションにはなるべく参加してコミュニケーションを取るように心がけています。

―利用者さんの意見から生まれた料理はありますか？

早…何だろなあ。逆に少し凝ったトマトソースを使ったりすると不評だったり。やっぱり昔ながらの煮物なんかが喜ばれる。結局、食べてもらえる食事というのは変わった料理より食べ慣れたもののほうが良い傾向にあるようです。献立の幅が広がらなくて申し訳ないのですけど。

水…でも一方で、女性の利用者さんや食べることが好きな方は、カボチャは煮物しか知らなかったけど、ここに来てちよつと甘く味付けしたのは凄く美味しくていいわねとか。

「美味しかった」が喜び

早…検査のドクターが「今日は何が入ってたの？ 美味しかった」って栄養課まで来てくれる。嬉しいです。

―今の話ともつながりますが仕事への思い、やりがいなど聞かせてください。

早…食を通じて、利用者様の健康のサポートが出来ることです。美味しかったって喜んでもらえることがとてもやりがいにつながっています。

水…同じくです。やっぱり美味しかったと言っていただけることが一番です。あとは最後まで口で食べていただけるように、寄り添っていったらと思っています。

―本当にそうですね。やはり看取りの時期に入ると葛藤がありますか？

水…明らかに食べられなくなってくるとやはり…でも普段の食事が摂れなくなった方が、最後に食べたいもの、うなぎとかラーメンとかを本当に最後に食べられた時、もうミキサー食も一口食べられるかどうかという方がすごく嬉しいような顔して食べるんです。

早…それも自分からもつとよ

こせぐらいな感じで。ラーメンなんてね。

水…すごく切ないんですけど、でも、うん…。その表情が、嬉しそうな表情が忘れられませんか。

早…やっぱり食って大事なのかなつと痛感します。

―これまでに特に苦労した経験はありますか？

早…想定外のできごとが起こった時ですね。例えば停電でも利用者さんの食事を一回でも欠くことはできませんから。東日本大震災の時も計画停電で電気が使えない時間があり、作業手順を変えたりして乗り越えました。

栄養課は皆がみんな、利用者さんのためにという気持ちが強くて。だから食事変更もかなりわがままを聞いています。変形食といって食事が食べられなくなつた方、少量高カロリーで2、3品なら食べ

られる方が今20名程いますが、一人一人セレクト食にしています。主食もご飯なら食べる。パンなら食べられる。飲み物もこれなら飲めるみたいなことを一人ずつ探ってお出ししています。少しずつでも食べられるようになったら、普通のお食事に戻れるような努力をしています。

例えばもともと経管栄養で入所された方で初めは水分しか摂れなかった。その水分もムせて難しかったのだけど、病棟の職員も一生懸命やつてくれ、少しずつ食べられるものを増やしていった、最終的に今は普通のおかゆとみじんのおかずが食べられようになりました。栄養状態もいいです。そうやって快復されている方を見ると嬉しいです。水…あとは今まさにがんばっている最中なのですが、

食事に興味がないとか、頭

の中で病院食は薄味で食べられないとか仰ってなかなか手をつけてくれない。口の中も嚥下もしつかりしているし、歩いて、食べられるんだけど。そのような方も病棟の職員とたくさん声掛けしながら日々会話をしているんですけど、未だにご飯は嫌だと仰るのでパンケーキにしてみたりしてパンケーキも時間差でおやつにお出ししたりと工夫しているけれど、なかなかうまくいかない。外のご飯は食べたいけどここのは嫌だつて。手こずっています。

早…でも、ちよつとしたきっかけでカレーは好きだつて言つて、カレー全部食べてくれた人もいます。

水…今はきっかけを探しているところですね。

早…あとはコーヒーフットという好きなワードが出てきたので、更に会話で引き出していい

かなと思っています。でもコーヒーなら飲むっていうのは前進だよ。

―その方が食べられるようになったら、苦勞が喜びに変わるんでしょね。

水…やはり日々の会話は大切だなと思います。あとは、焼き芋とか居酒屋などの院内行事に参加すると、いつもと違う利用者さんを見られて、あ、この方こういうのが好きなんだとか、いきいきとした笑顔が見られることでこちらも元気をもらえます。

―これからも利用者様のためよりよい食事を提供できるようにがんばってください。

ありがとうございます！
(聞き手は新聞編集担当の安田と遠藤でした)



26回目の入職1年目

介護職員 松橋 孝尚

数年前、清水理事長から介護士1人1人へプレゼントしてもらった『マンガでわかる！認知症の人が見ている世界』という本があり、読み返しています。監修者まえがきに「日本の認知症の患者数は右肩上がりに増加し（中略）2025年には70万人に達し、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症に」とあり、今年がその2025年。

当院の名称が「御殿場高原病院」から「富士山麓病院」へと変わった平成22年冬。ちょうどその時期、私の母が

未だ65歳にもならない若さで他界しました。葬儀を東京で行なったのですが、当時の看

護師長がご主人と一緒にわざわざ東京まで葬儀へ来てくれたことがありました。

私は平成11年8月16日、当院に26歳で入職し、今夏52歳で満26年になります。26年といつても看護師など他の業種を含めると、私より長い職員はまだまだ多くいますが、同じ介護士の中では私より長い方は2名のみ。つまり私が3番目の古顔となりました。この26年を振り返り、その看護師長など多くの職員に助けられ、そして利用者様から多くを学ばせて頂いたことを強く感じ、皆様に感謝しています。今、この原稿を書いているように、入職し間もない頃も原稿を書かせて頂いたことがあります。

私の親戚が入院を検討し当院を訪れた時、病院の新聞を読み、執筆者である私の名を

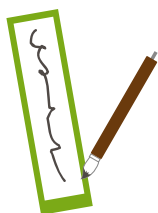
見て当時のケースワーカーに問い合わせ、そのこともきつかけとなつてか、入院されたことが有りました。親戚は入院後、少し経って亡くなり、伊豆での葬儀に私も参列し、それは親戚・身内の絆を再確認した私にとって貴重な経験でした。

昔、趣味でやっていた『五行歌』という短詩を以前こちらの新聞に連載させてもらっていた時期がありました。

患者様のご家族にも、五行歌の同人誌に投稿されている方がおられ、話が弾み、ちよつと恥ずかしく、そして凄く嬉しく思つたものでした。私が自費出版で出した五行歌の本に、丁寧な感想の手紙をくださるご家族様もおられ、文末に「いつも主人に優しくしてくださりありがとうございます」と書いてくださって

嬉しく、私はそのお手紙を今でも宝物として大事に保管しています。

五行歌。私の歌などは全く拙く、お恥ずかしいものですが、その同人誌に投稿している他の方の五行歌には、素晴らしい歌が数えきれないほどあります。その中でも私は、或ることを100回、永く辛抱強く続けた人が「今日は100歩目ではない。100回目の第1歩だ」という決意を込めて詠った歌が好きで、印象に残っていました。それに習うつもりで、私も「今年は26年目ではない。26回目の入職1年目だ」との思いで決意新たに日々自分の課題を乗り越えていく決意です。



リーダー業務を

行ってみて

介護職員 樽林 佑伊人

今回、新聞の原稿を依頼され、緊張した気持ちで執筆させていただいている樽林佑伊人（くればやし ゆいと）と申します。

私は前の職場で介護の仕事を1年、そして富士山麓病院介護医療院2階療養棟にて8年、合わせて9年介護職として勤務させていただいています。

私は普段、主に夜勤業務を中心とし、時々日勤での業務を行っております。

しかし日勤時でのリーダー業務を任されたことがあります。勤務して7年6カ月が経ったところから初めて声をかけていただき、日勤に入った際にはリーダー業務を

させていただくことが増えてきました。

私は人前に出て指示を出すことに苦手意識があり大変緊張しましたが、自分のレベルアップに繋がるから頑張っていきたいと思いました。

他の職員が、忙しそうにしているのを見ていたのですが、実際に行ってみるとやはり大変でした。

リーダー業務は、職員の役割分担や看護師リーダーからの申し送りを聞いて伝達すること、利用者様のトイレ誘導とオムツ交換の結果を排泄記録へ記録したり、委員会などの会議があった際、日誌に記入するなどがあります。これらは、リーダー業務を任される前まではやっていなかった業務でした。

その中で、私が未熟のためメモをうまく取れず、伝達をしつかりと伝えることができ

なかったことと、予定変更を他の職員へ依頼することをためらい、遅くなってしまうことがありました。

私はこれではダメだと思い先輩職員のメモの取り方、特に伝えたいことに重点をおいて書いたり、自分が読みやすいように自分なりの言葉でまとめとめること、指示やお願いをする際には相手が嫌な気持ちにならないように配慮していくことも学ばせてもらいました。

リーダー業務は2階サポーター（介護職員）さんをまとめ、看護師さんや多職種と上手に連携をとるための重要なポジションです。まずは先輩職員から学ばせていただいたことを実践で活かし、やるべきことをしっかりとやる。そして皆さんが安心して業務に集中できるよう努力を続けていきたいと思っています。

また、リーダーの大変さがわかったので、リーダーでない時にはリーダーさんを支えられるよう配慮していきたいとも思いました。



いつも優しい印象の樽林さん（右）



信頼関係を築くことの大切さ

看護職員 中村 純子

初めまして。今年の4月に入職いたしました中村純子と申します。私は3月に看護学校を卒業し、新卒で富士山麓病院介護医療院に入職いたしました。

看護学校に入学する前は社会人として様々な職種を経験してきました。これまで何度も、人の役に立てる仕事がしたい、看護師になりたいという気持ちが高ぶることがありましたが、機会に恵まれず、看護の道のスタートを切ったのが40代。御殿場市に移住し、その夢をスタートさせ今に至ります。

当施設に入職し、現在4か月が過ぎました。3階療養棟で利用者様と関わらせていた

だく中で、先輩の看護職員や介護職員の方々に多くのことを教わっております。スタッフの皆さんは明るく、活気があり、何より利用者様想いです。そして、まだ自分の看護技術に不安がある私に対して「こうするといいですよ」と丁寧を教えてくださる心強い先輩方であり「この利用者さんはご本人に任せても大丈夫ですよ」と、具体的なアドバイスや、利用者様への対応についての相談を快く聞いてくださいます。

入職して学ばせて頂いたことの一つは、利用者様一人ひとりの状態や個性を深く理解し、その方に合ったコミュニケーションを通じて信頼関係を築いていくことの大切さです。コミュニケーションや利用者様との関わり方を通して、普段の様子がいつもと違ったり、きや、行動・心理症状に対し、

その背景にある理由を、細やかな観察力と専門知識の観点からも検討し、不安や混乱を最小限に抑えるための支援を行う必要があります。体調の変化を伝えるに、認知症の方々のわずかなサインも見逃さず、迅速かつ的確な対応を行うことが求められます。

スタッフの優しい声掛けや、きめ細やかな心遣いによって、利用者様が心を開き、柔軟な表情と共に、安定して過ごせるように導かれていく姿に、まだ自分の対応力の足りなさを痛感する日々です。

また、当施設の良さは、多職種連携によるチームケアが利用者様に対して行われることだと思っています。先日開催された近隣高校生による演奏会では、利用者様の日常に、一時でも変化をもたらす効果があると感じました。印象的だったのは、演奏後マイクを向けられ感想を述べられた利

用者様が「こんな素晴らしい演奏は初めて聴いた」と表情が明るく、目を輝かせ、満面の笑みで答えられていたことです。施設で生活される利用者様に少しでも明るく、楽しい気持ちになれるお手伝いができることは、生活に彩りを添える大切なことだと思います。

このようにスタッフ同士の連携と双方の密な情報交換により、利用者様に対して、医療的な視点と生活援助の視点を融合させた総合的なケアを提供している点は、この施設だからこそのことだと思います。

利用者様が穏やかに生活でき、その方が望まれる日々に少しでも近づけられるためにも、二人三脚のような存在になれるよう、これからも携わっていききたいと思っています。

レクリエーションフォトギャラリー

かき氷は最高です



御殿場西高ダンス部のみなさん!



みんなで盆踊り



サマーコンサートで音楽鑑賞



めざせ ストライク!



居酒屋さんろくでかんぱ〜い!



お気楽
歴史
エッセイ

⑤

「やせがまん」と本音

内藤 真治



「お腹がすいてもひもじうはない」という言葉があります。誰だって長い間食わずにいればひもじくなるのに、ずいぶん無理しますよね。

伊達騒動を題材にした浄瑠璃「伽羅先代萩」の中で、幼い千松が主家を守ろうと必死の母に言うセリフ。主君を守るため、千松は毒入りの菓子を承知の上で食べて殺される悲劇です。ああ、侍の子はつらい。

こどもにまで「やせがまん」を要求した大人は「武士は食わねど高楊枝」でした。

たとえ腹ペコでも、いかにも今食べ終わって満腹のような顔で楊枝をくわえていなければならぬのです。武士と

しての体面を保つのはたいへんです。

欲望を否定する武士道徳に對し、天下泰平の元禄期に豊かな経済力を背景に花開いた町人文化は「欲望肯定」でした。一連の好色物や町人物など浮世草子(小説)を書いた井原西鶴は「人間は欲に手足のついたもの」と言っています。

江戸時代の支配階級である武士は人口の一割にも満たぬ少数でした。圧倒的多数は百姓Ⅱ農民です。そして武士階級の暮らしは農民から取り立てる年貢の上に成り立っていました。

①百姓と胡麻の油は絞れば絞るほど出るもの也

②百姓は死なぬよう生きぬよ

う治めること肝要なり

右の二つの言葉は、ともに支配者の農民観を示すものですが、両者には約百年の隔たりがあります。①②どちらが先でどちらが後かわかりますか？

答 ①は八代將軍吉宗の時の勘定奉行(今なら財務大臣)のセリフ ②は幕府を開いた徳川家康自身の言葉です。家康の教えは「一年の入用作食を積もらせ」Ⅱ百姓の家族が食べる食料と翌年の田植えに使う種もみの分は残して「その余りを年貢に納むべし」。つまり来年以降も米の再生産ができるように取りすぎではないと言ったのです。つまり②が先。

それが吉宗の代になると「百姓はゴマの油!」。テレビ「暴れん坊將軍」はカッコよくても、以後、百姓一揆が急増します。

でもこれは吉宗の責任ではありません。平和が続いて商

品経済が発展したのに、経済の基本は農業だとする重農主義(農本主義)が時代に合わなくなったのです。

九代家重、十代家治の側用人として仕えた田沼意次はわずか数百石の旗本から大名(一万石以上)へと昇進、遠州相良藩(現・牧之原市)で最後は五万三千石の老中(今なら首相)にまで異例の出世をしました。

彼は百姓から搾り取るばかりが能ではないと商人資本に着目、干拓で農地を増やそうとしたり株仲間(同業組合)を作らせ、冥加金、運上金を課するなど財政再建に努めました。

保守派は反発し家治の死と共に田沼は失脚、松平定信の寛政改革で「ワイロ政治家像」が定着しました。

農本主義に逆戻りした幕府、諸藩はますます財政難、「武士は食わねど高楊枝」で、社会の矛盾はいよいよ深まります。



「景色を眺めながら」

事務職員 遠藤 輝力

今年の3月に介護医療院に入職し、まもなく半年が経過しようとしています。

前職はサービス業、前々職では不動産会社で賃貸物件の管理をしていました。

基本的には、プライベートではインドア派ですが、ここ数年でドライブが趣味になりました。

不動産会社に勤務していた時代は賃貸物件（アパート）の管理を主に行っており、担当が沼津を除く伊豆半島エリアでした。

オーナー様とのやり取りや入居前の準備（鍵交換・掃除・通電確認等）、クレーム対応のため、下田や熱海、伊東まで駆り出されていました。アパートで漏水やトイレ詰

まりがあると業者がその日のうちに対応に行けないことが多く、その場合は自分で直しに行きました。

移動中、春に河津町を通る時に桜を見たり、熱海から下田方面に向かう海岸線沿いの景色を眺めたりすることが仕事中の数少ない楽しみでした。「今日が仕事じゃなければなあ」と休日めったに家から出ない私も、ついそう思ってしまうくらいのすばらしい景色です。

しかし休みの日には体力と気力の回復に注力していたため、あまり外出する元気がありませんでした。

前職を辞めてから時間が経ってきたため、ふと海岸線沿いをドライブしたいと思い立ち、

御殿場から246号線を通り、三島市から伊豆の国市に出て、亀石峠を越え、伊東の海岸線沿いをのんびり走ったのです。その時の景色や空気の感動がクセになり、今でも時間がある時は車を走らせています。

私は車自体には大したこだわりはなく、海岸線沿いのようなゆったりした道を運転することが好きです。

亀石峠の薄暗く、カーブの多い道を通ってから伊東の開けた道に出た時の解放感も、山と海が近い伊豆半島の醍醐味だと思います。



編集後記

エアコンの少ない北海道でも連日猛暑の夏でした。

昨年九月発行、一七四号の編集後記には「観測史上で最も暑い夏だったようです」。

おとしの一七一号には、「大変な夏でした。こんな異常気象がこれから毎年続くのでしょうか」と同じようなことを書いていました。

暑いのは我慢しても、地球沸騰時代(国連事務総長)で農作物にも、漁獲高にも「異変」が起きているとのこと。

本気で温暖化を止めないと人類の、とりわけ食料自給率の低い日本の将来には不安がつります。私たち一人ひとりにも「何かできることはなか」が問われているように思います。

今号も暑さに負けぬ各部署からのいい原稿や報告が集まりました。(内藤 真治)